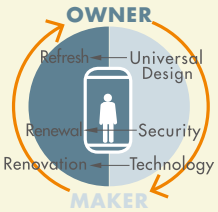
連載 ―安全で快適なエレベーターを探る― 10

リニューアル探検隊が行く！



河合病院

埼玉県川口市にある河合病院はベッド数120床、2次救急病院に指定されている地域の中核病院だ。河合逸郎理事長は病院の機能を守り、安全性を高めるためにエレベーターのリニューアルを決意した。だが、リニューアルのためには1台しかないエレベーターを止めなければならない。その間、入院患者や急患はどうするのか。病院職員たちは患者に迷惑をかけないリニューアルを求めて力を合わせた。

1

▲エレベーター・5階のりば
エレベーターは大型の配膳車も運搬できる大容量のタイプ。
今回のリニューアルにより、かご室内に車いす用の操作盤が左右2カ所に追加された。

地震への安全性を高めるためにリニューアル

埼玉県川口市にある医療法人厚和会河合病院は地域の中核病院として1988年以来、医療活動を続けている。ベッド数は120床、2次救急病院にも指定されている。5階建ての院内は1階が診察や検査室など、2階が手術室、3階が一般病棟、4～5階が療養病棟となっており、車いすで移動する患者も多い。その移動手段として不可欠なのがエレベーターだ。

院内にはエレベーターが1台あり、設置以来20年以上、患者や見舞客だけでなく、入院患者用の配膳車を運んできた。同病院の小野田政美事務長はこう語る。

「これまで特に大きなトラブルや閉じ込めなども起

リニューアル探検隊

隊長
篠崎 正彦
東洋大学工学部建築学科准教授。1968年東京都生まれ。専門分野は、建築計画と環境行動研究。特に、都市での生活様式と住居、施設の関係を研究している。現在、ベトナムにおける集合住宅の調査研究を進めている。

隊員
山田 花子
篠崎先生の研究室でベトナム建築を学ぶ。趣味はピアノとフルート。

3

▲エレベーター・かご室内操作盤
リニューアルにより、3カ所の操作盤がバリアフリーになった。
また、階数表示も大きく見やすくなっている。

2

▲エレベーター・かご室
病院にふさわしい清潔で落ち着いたデザイン。
車いす用操作盤はかご室内で車いすを移動しなくても
操作できるよう左右に取り付けられている。

きなかったのですが、2004年の新潟県中越地震のとき、管制装置が働き、最寄り階に止まったことがありました。そこで、理事長が地震に対してより安全性を高めようと考え、リニューアルを決断したのです」

それまで、同病院のエレベーターには本震であるS波を感知して管制運転をする機能はついていたが、初期微動であるP波を感知し、最寄り階に自動着床すれば安全性は高まる。河合逸郎理事長はこのP波感知付の地震時管制装置を導入したいと考えたのだ。

また、車いすの患者は高い位置にある操作ボタンを押すことができなかったため、低い位置にボタンを設置する必要性もあった。

工事日程は08年11月と決めた。11月が統計的に年間で最も救急入院が少ない時期だからだ。

標準的に制御リニューアルには10日前後の日数がかかる。だが、中核病院として10日間もエレベーターを止めるわけにはいかない。急患もあるかもしれないし、車いすの入院患者が他の階へ移動できなくなる。また、容態の急変などで、2階の手術室に運び込む必要性に迫られるおそれもある。平石守院長は「工期が大きな問題でした。なるべく短縮してくれるように東芝エレベータにお願いしました」と語る。

入院患者への配膳が大きな問題

もうひとつの大きな問題が、100人以上いる入院患者への食事の配膳だった。同病院ではおいしく食べてもらうために院内の厨房で委託業者が調理し、そのまま保温保冷配膳車で病室まで運ぶ。しかし、この配膳車は250kgもあり、エレベーターなしでは移動できない。そこで、調理した食事を弁当容器に詰め、トレイで階段を使って運ぶ方法を採用し、そのための予行練習もした。

また、容態急変などで患者を担架で運ぶための訓練

平石 守氏
医療法人厚和会
河合病院
院長

小野田 政美氏
医療法人厚和会
河合病院
事務長

P O I N T

建物にふさわしい機能を厳選した安心できるリニューアル

最近では建物内の交通機関としてさまざまな場所に取り付けられているエレベーターですが、やはり建物の用途によってふさわしいエレベーターというものがあります。

病院のエレベーターに求められるのは、まず、清潔感と安心感です。

白とベージュ、そして銀色を基調にした色彩は、病院と聞いてまず皆さんが思い浮かべる定番の色だからこその安心感を利用者にもたらしてくれます。

そして仕様としても、かご室内手すりやステンレスの腰板、背面の鏡、車いす対応の操作盤など、病院のエレベーターとして必要な機能をきちんと搭載しています。特に、大型のエレベーターでは、車いす対応の操作盤が両側についていることで、片手が不自由な方でも車椅子を回転させることなく操作できます。

加えて、今回のリニューアルでP波感知器付きの地震時管制運転装置と停電時自動着床装置を導入されたとのこと。目に見えない部分でも「安心感」を追求している姿勢に好感が持てます。

また、エレベーターというのは、可動部のある機械だけに、技術の進歩や部品の劣化が他の建物内部品より早いです。他の建物で快適なエレベーターを体験してしまうと、それに慣れてしまい、少しでも遅かったり揺れたりすると「おや？」と感じてしまう。人間というのは、快適さに慣れるのはとても早く、なかなか要求水準は下げられないものなのです。そういった意味でも、他の建物と比べられることが多い商業施設や病院では、早めのリニューアルも、建物の印象を良くします。

河合病院のエレベーターはまさしく「病院のエレベーター」として求められているものをきちんと把握し、そのニーズに対応したものといえるでしょう。(談)

医療法人厚和会河合病院
1988年に医療法人として開業。地域の中核病院として２次救急病院に指定されている。ベッド数は120床。内科、胃腸科、外科、形成外科、肛門科、放射線科、リウマチ科、リハビリテーション科を持つ総合病院。

■住所：埼玉県川口市領家 3-6-7
■TEL：048-222-0190

も行った。エレベーターが止まる間は他の病院に救急患者を引き受けてもらうようにお願いをした。そこまで神経を使わなくては病院のエレベーターリニューアルはできない。

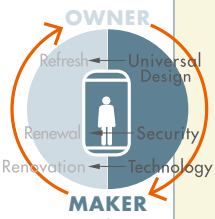
東芝エレベータ側も病院の思いに応え、完全停止は5日間、工事終了7日間という短工期で完了した。

「停止が5日間で助かりました。P波感知装置や停電時の自動着床機能も導入できたので、安全性が高まった上に明るくなって病院の雰囲気もよくなりました」と平石院長。

「動きがスムーズだし、静か。操作ボタンや着床階などを案内するアナウンスも車いすの患者に好評です」と小野田事務長は語る。車いすでは前向きにエレベーターに乗るので、表示階が見えない。そのためオートアナウンスも導入したのだ。

院内の移動や運搬という役割を果たすエレベーターの重要性を再認識したリニューアルだった。

メーカーの立場から…



東芝エレベータ株式会社

病院という人の命を預かる重要な施設のエレベーターリニューアルでは入念な準備と、迅速な工事が必要だ。難題に挑戦して見事にクリアした営業担当の目戸氏と、工事担当の簡氏に聞いた。

目戸 貴之氏
北関東支社
営業部
リニューアル営業担当

簡 盛志氏
北関東支社
建設部
リニューアル工事
技術グループ

リニューアルに病院スタッフは戸惑い

「最初に河合理事長とお会いし、地震のP波感知機能についてお話しすると、『ぜひ導入したい』とおっしゃいました。そのとき、車いすの患者さんが操作ボタンに手が届かないので、誰かが来るまで待っていなければならない状況だというお話もあり、即座にリニューアルを決定されたのです」

東芝エレベータ北関東支社のリニューアル営業担当である目戸貴之氏はこう語る。実は東芝エレベータでは、納入したお客さまに対してリニューアルに関するアンケート調査を実施していた。それにすぐ返答してくれたのが河合病院だった。その回答には地震対策への不安が書かれており、河合理事長は当初から強い危機感を持っていた。

「リニューアルはすぐに決まったのですが、その後、入院患者さんへの配膳の問題が持ち上がり、病院スタッフのみなさんが相当、戸惑っていらっしゃることがわかりました」と目戸氏は述懐する。

そこで、目戸氏は上司の岡課長にも相談し、食事を宅配してくれる業者を探したり、給食会社に話を聞いたりしたが、まずは院内の委託業者に対応策があるかどうか相談することを病院側に提案した。

すると、業者は弁当容器に詰めて運べばいいと答え、当面の障害は消えた。しかし、患者さんや急患のことを考えると病院側としてはエレベーターの停止期間をなるべく短くしたい。目戸氏は工事担当の簡盛志氏と相談しながら、日程や工期短縮の工夫を考えた。

「当初は7日から10日は停止しなければならないと考えていましたが、細かい工程を工夫して詰め、ギリギリまでエレベーターを動かすことにしました」

簡氏も「基本的には最低10日はかかります。完了まで7日というのは実にタイトな日程ですが、お客さまも協力的で工事は問題もなくできました」と語る。

病院側は前述したように、配膳や患者を担架で運ぶ訓練をするなど、できる限りの努力をしていた。

「実は配膳の予行練習や担架の訓練までしているとは知らなかったんです。河合病院の周辺は人口が多いのに他に病院はないので、急患の受け入れを一時的に他の病院に代わってもらったりするなど、お客さまがどれほど神経を使っていらっしゃるのか痛感しました」と目戸氏は改めて、病院のリニューアルの難しさを感じた。

高齢者の多い病院にリニューアルは不可欠

工事中も入院患者はいるので、工事は朝から始めて夜6時には終了するようにした。

「病院ですから音やほこりを出さないように気を遣いましたが、ハンマードリルで床をはがすときに大きな音を出してしまいました。お叱りを受けるところですが、工事がうまくできるようにいろいろな面で協力していただきました」と簡氏。

ただし、機材や材料を院内に置くわけにいかないので、少し離れた駐車場に保管した。一般の道路を通ることになるのでトラブルにならないように気をつけたという。

「工事を担当してくれたパートナー企業には機材搬入で面倒をかけてしまいましたが、一所懸命取り組んでくれて感謝しています」と簡氏は語る。

リニューアル後は、理事長も院内の職員にも好評であった。

「特に車いすの患者さんが喜んでくれたというのでうれしかったですね。実はオートアナウンスの導入はこちらから提案したのです。入院患者さんに配慮し、夜は6時にアナウンスが切れるよう設定しています」

かご室内の奥には車いすの患者が後ろを見られるようにミラーを貼り、側面には手すりを配置した。天井と床を新しくし、壁面パネルも交換した。これによって、エレベーターが明るくなり、平石院長からは「雰囲気がよくなった」と喜んでいただいた。

「機能性や安全性の向上のためにも、リニューアルは必要不可欠です。今後も引き続きリニューアルを普及させていきたい」と目戸氏は気を引き締めている。